

氏名	川島 大幸
ヨミガナ	カワシマ ヒロユキ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第510号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 光の現象をめぐる彫刻表現 〈作品〉 《Interacting garden: BLUE》 《水神 — natural born —》 《STONE — prototype —》 《INVISIBLE》

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	林 武史
（論文第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	布施 英利
（作品第1副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	原 真一
（副査）	東京藝術大学	教授	（美術学部）	佐藤 時啓
（副査）	東京藝術大学	准教授	（美術学部）	大巻 伸嗣

（論文内容の要旨）

本論文は光と視覚、知覚、かたち、光の現象による異世界について科学的事実と制作の中での実体験を交えて、彫刻と光の現象の関係を考察する。

かたちの認識は触覚と視覚による認識のそれぞれ、または両方により可能である。人の視覚は色の変化や光と影の関係から、そこにかたちが生まれていると認識する。これは実在するかたちだけではなく、絵画や、映像による3DCGの中にも見ることができる。近年の視覚による立体認識・視覚表現技術の発達は著しいものがある。本論文では視覚の認識によるかたちを「視覚のかたち」という言葉で提示する。

人は日常の中で、ものを認識する行為の大部分を視覚に頼っている。ちょうど筆者（1987年生まれ）が育った90年代からゼロ年代は、急激に視覚的な刺激が増えた時代である。その意味に於いて光の刺激からは切っても切り離すことができない世代でもある。また、人はこれまでの歴史の中で、文化や宗教、生活に光との密接な関係をみることができる。そして、光の現象は変化をするという特徴をもつ。これは実体験することではしか感じるができない。それは彫刻と共通する部分でもある。

そこで、筆者は光について考察していく。その中で光を受容する器官としての視覚について、さらには視覚を有している人の知覚について述べる。

視覚は曖昧で不確かなものである。また、視覚は周囲の状況や環境、見る側の精神状態、人の身長や動き、年齢など個人差があり差異が生じるものである。これらのことから、ほんの少しの視覚の差異により「ここではない何処か（異世界）」をみることができる可能性がある。

さらに、光の現象が付随することにより、その物体がもつ物質性が減少して見えることがある。この現象は減じた物質性と引き換えに異世界を物体にもたらし効果がある。これは視覚的な刺激が増えたことと関係し、映画や文学などにより広く大衆に異世界が認識、理解されたことで、知覚することが可能となるものである。

また、人は視覚により光を受容し、精神に高揚やカタルシス、安心感が生ずる。光を受容する器官としての視覚はゲーテの言葉を引用すると精神に近いものであり、現代に於いて切り離すことができないことを考えれば、視覚は現代の精神であると捉えることができる。

筆者は視覚が現代の精神であり、光の現象は異世界への入り口であると考え、それらが付随する彫刻とは

何かについて考察していく。

本論文は全体を以下の序章・3つの章・終章によって構成している。

序章では、本論文への導入として、筆者の彫刻の根本である「在ること」、光と視覚、知覚について、「視覚のかたち」、「異世界」についてふれる。

第1章は「光の依代としての彫刻」と題し、普段の制作の中で実感する自身の身体ともの、光の関係、現代のかたちの在り方、彫刻の痕跡と存在について記述する。また、視覚が遮断された時の知覚についての体験を述べ、プリズムとスペクトルについて、投影と実体について高松次郎やプロジェクションマッピング、映画、ホログラムなどを取り上げ、自身の考えを述べる。加えて、視覚のかたちについて言及する。

第2章は「異世界への入り口としての光」と題し、母親の死による空虚なところを満たした木漏れ日に、物質と光の現象、光源の関係をみて、彫刻にその可能性を見出したことを記述し、光を受容する器官としての視覚がもつ曖昧さ、不確かさにより、体験することの必要性和変化をするという特徴を述べるとともに、それらの特徴から起こる異世界を日常、文学、映画から考察する。日常に潜む光の現象による異世界として夜間の電車やショーウィンドウの闇とガラスの関係性を取り上げ、文学は谷崎潤一郎『陰翳礼讃』から視覚の特徴と谷崎の文面からみる異世界にふれ、映画からは『ミッション：8ミニッツ』、『2001年宇宙の旅』の中で使われる光の扱いから異世界について考察する。また、身体と艶の関係について考えを述べる。

第3章は「光の現象をめぐる彫刻表現」と題し、第1章と第2章で述べてきた光と視覚、かたちについての考えから、自作品に光を取り込んだ博士展提出作品《Interacting garden: BLUE》、《水神 -natural born-》、《STONE -prototype-》、《INVISIBLE》を題材に、作品形成の過程について言及する。また、冒頭で筆者の現在の彫刻観を記述する。

終章では、ここまでの考えから導き出される筆者の彫刻と光の現象との関わりについて述べ、異世界への入り口となる光の現象と現代の精神と言える視覚を纏わせた彫刻の可能性について結論を述べる。

(論文審査結果の要旨)

本論文の執筆者・川島大幸は、彫刻表現に「光」の効果を取り入れて制作・研究を行ってきた。この論文は、そのような彫刻制作と併行して研究してきた彫刻についての考察を論文としてまとめ、自身の芸術観を整理したものである。

本論文は、三章+序章と終章という構成になっている。

第一章は「光の依代としての彫刻」という章で、本論への導入として筆者が彫刻制作で扱っている素材である「石」の話から始めて、美術作品における影について高松次郎の作品を例に考察し、彫刻をスクリーンのような「光の依代」として、映像を彫刻に投影するという事について作例を挙げて考察している。彫刻は物質であり、であるがゆえに光を当てることで、彫刻も光も様々な表情を見せるが、そのような光と彫刻の可能性に言及している。

第二章は「異世界への入り口としての光」と題し、筆者が光の魅力にひかれた経緯や、自然や人工の光のあれこれについて具体的な例を挙げながら考察している。とくにシカゴにあるアニッシュ・カプーアの「クラウド・ゲート」の調査に出かけ、金属表面への周囲の光景が映り込む光の効果や、物質としての彫刻である金属表面のキズの印象などを報告している。鏡のような表面に映った像という、実在しないモノが作り出す光の世界について、彫刻との関わりで分析している。

第三章「光の現象をめぐる彫刻表現」では、筆者自身がこれまで制作してきた多彩な彫刻作品が、いかに光と関わるものであったかが紹介される。一章・二章で考察されたような光と彫刻の関係が、筆者の彫刻作品においても豊かに取り込まれ、ネオン管の光が磨かれた石の面に反射し、その光の形が見るものの移動と共に揺らめく「Interacting garden」や、美術館でなく大自然の海辺にインスタレーションされた「水神 -natural born -」に映し出されたアクリルケースの中の海水が、潮の干満と共に相貌を変えるさまを詳しく解説し、また石に真空蒸着メッキを塗った、表面が光を反射する巨大な「STONE - prototype-」、光学ガラスで胎児を造形し、そこに光をプロジェクションした「INVISIBLE」などの自作を紹介・分析する。

そして以上のような、光と彫刻(=石などの素材)の考察に、「水神 - natural born -」における月や地

球の重力という視点を加えることで、その世界観が「宇宙的」なものへと拡大し、本論のまとめとして「極限の彫刻は月である」という結論に至る。とくに、岩石の塊としての月が、石彫などの石との類似していることを指摘するのではなく「光が当たることで見える」という月の性質を、筆者が本論文で考察してきた光と彫刻の関係を表現したものとして結論づける。

このように本論文は、彫刻というものの表現の可能性や概念に「光」という視点を加えることで、彫刻の新しい広がりを示し、それによって新しい美を生み出す。それらの主張を論文としてきちんとまとめてあり、筆者自身の彫刻作品と併せて読むことで、新しさと深さを伴った、優れた論文である。

よって川島大幸の「光の現象をめぐる彫刻表現」を、博士論文として合格とする。

（作品審査結果の要旨）

川島大幸は彫刻と光の関係に焦点を当て研究を続けてきた。ものと光、物質と非物質からなる「視覚のかたち」が創り出す異世界を模索してきた。

提出作品《Interacting garden : blue》は石とネオンで作られたシリーズ作品である。内部が削り込まれ研磨された円形の黒御影石にネオン管が取り付けられ、青いネオン光が映り込む。映る光を非物質と捉え、物質と非物質の相互関係を作り出した。有機的に波打つ凹面に光の陰影が反射し、視線の角度や移動によって様々な動きと表情を見せる。

《水神-natural born-》は、レジデンスプログラムで制作、発表された作品である。川と海が合流する汽水域の海岸に透明のガラス板で作られた社が設置される。満潮時には水没し干潮時には内部に水を充たし出現する。光が差し込むと海水で満たされた社はプリズムと同じ効果を持つこととなり、虹色のスペクトルを生み出す。潮の満ち引きの現象、つまり地球と月の引力の関係を取り込んだ宇宙的なスケールと物語を感じさせる作品である。

《STONE-prototype》は庭石に使用する自然石から型を取り、形と大きさをそのままFRPに写し換え表面にメッキを施した作品である。石彫作品限定の展覧会に出品するために制作された。表面の銀色は石が持つ色質と重量感を奪うとともに自然石にはない反射光を得て、その石ではない「石」の、物質としての異質感を増幅させる。石を表層に形骸化し、石彫の概念を揺さぶる。

《INVISIBLE》はガラスと映像からなる作品である。胎児と骸骨の構成をガラスの塊から彫り出し、表面の傷がなくなるまで丁寧に研磨している。透明を獲得した塊は回転するテーブルに置かれ、さらに映像が投影される。その映像は月を撮影したものだ。ガラスの彫刻を透過した月光は光でもあり影でもある。背後の壁面に映る光（影）は、作者の言う「視覚のかたち」を創りだす。緩やかに揺れ動く光（影）は掴み取ることはできないが、奥行きのある立体感と接触性を感じさせ幻想的な空間を作る。

4つの作品は、形態、素材、技術的なアプローチがそれぞれ異なっている。そこに共通する作者の視線は、実在する造形物（彫刻）と光を経由して立ち現れる二次的な現象や空間にある。川島の彫刻（もの）は間接的な位置付けとして存在し、光を反射あるいは吸収しながら知覚的な異界を映し出す装置として機能する。それはまるで太陽の光を反射する「月」のような存在であり、光あるいは影を纏いながら見る者を内的な異世界へと導く。

彫刻に真摯に向き合い、独自の視点から様々な方法を試し模索された作品は非常に優れたものであり、学位授与に値すると審査委員全員に認められた。

（総合審査結果の要旨）

川島大幸は、彫刻は異世界への入り口である光の現象（現代の精神）を現実世界に留めておくための依代であると考え。本研究は、その出处を明らかにするために、プロジェクションマッピングや映画など彼の作品に影響を与えてきた事象を辿りながら彫刻と光の現象の関係を読み進むものである。彼の彫刻の主素材は石である。石とのやり取りから身体性や時間を、制作環境から日月星辰などの要素を会得し、艶めく表面、艶かしいかたちを創出させることが出来た。学部、修士、博士課程を通して「在ること」を念頭に置きつつ、

彫刻の既成概念に囚われることなく、決まったかたちを取らない彫刻観によって「型」という新しい表現を導き出してきた。

提出論文は、光を主軸に彫刻を語る。光を通して外界と内界を繋ぐ役割をもつ視覚と触覚の関係を考察する。そして光の現象を彫刻に纏わせることで異世界性を獲得することを試みる。木漏れ日から始まる彫刻が現象を伴って存在させる可能性について、高松次郎の影による実在と不在、建築に投影されたプロジェクションマッピング、映画のタイトル・クレジットやプリズムとスペクトルの関係など光の変容によって生じる事柄への論考は、彼の世代から発する偽りのない思惟として著されており、好感が持てる。また、顕著な特色として彼の青年時代からの趣味であるSF映画から援用されるイメージが多数見られ、作品の展開に少なからず感化を受けていることが挙げられる。論考の結びとして「光の現象を伴った彫刻は月である」と明確に述べる光と彫刻の関係は卓見であり、彼の制作に対する姿勢を強く現すものである。

提出作品は、4点。これらの作品に通底するのは、彼の研究テーマである光と彫刻の関係がそれぞれに独自の言葉をもって深遠に展開している様である。「Interacting garden: BLUE」は青いネオン管と黒御影石で、「水神 -natural born-」はガラスの祠が海の干満によって表出、水没を繰り返す。「STONE -prototype-」は自然石を型とりFRPに置き換えメッキしたことで表れるイメージの変容。「INVISIBLE」はガラスの塊に月の写真をプロジェクションすることで「視覚のかたち」を生み出す。彼の光に対する想いが、派手さはないがこれらの作品ひとつひとつから静謐ながら色気を持って迫ってくる様子は秀逸である。

川島大幸は、この研究によって作品が物質を超越した精神世界の光と彫刻が相まって、現代の精神と異世界を内包するものとなることを提示した。論述展開、彫刻研究の内容に思索の痕跡が随所に見られ、論文、作品ともに高く評価出来る。

以上のような結果から、審査にあたった主査、副査ならびに彫刻科教員一同、全員一致で博士学位授与に相応しいと判断した。